

【追悼記事】

故川窪啓資先生と英米文化研究会 思い出と感謝

英米文化研究会会長 日 影 尚 之

麗澤大学英米文化研究会の第二代会長であり、麗澤大学外国語学部教授、外国語学部長、同大学院言語教育研究科比較文明文化専攻教授、日本ナサニエル・ホーソン協会会長、国際比較文明学会副会長、日本比較文明学会理事などを歴任された川窪啓資先生が、令和元年10月6日に逝去された。先生は本研究会の重鎮であり、その存在の大きさについてはとても一言で言い表せるようなものではないが、ここに英米研究会を代表してご冥福をお祈りするとともに、改めて感謝の意を表したいと思う。

川窪先生が本研究会の会長をされていたころは、たしか毎年6～7月ころに年次総会を開き、総会と合わせて外部の研究者をお招きする年次記念講演会を開催していた。私が記憶しているだけでも、例えば英米文学関係では、イギリスの作家トマス・ハーディーやヴァージニア・ウルフほかの研究で知られる英文学者深澤俊先生やアメリカの作家エドガー・アラン・ポーの研究者として知られる内田市五郎先生（たしか川窪先生がデューク大学に2年間留学していた時に1年間だけ一緒だったと聞いた覚えがある）などを本研究会の講演者としてお招きし、お話をうかがうことができた。一流の研究者の刺激に満ちたお話を身近に聞くことができたのも川窪先生のお陰であり、改めてその人脈の広さや学識に敬意を表したい。

申し遅れたが、川窪先生の経歴や業績については、本研究会の研究誌『麗澤レビュー』15号「川窪啓資先生退職記念号」（2009年5月）に詳しいので割愛させていただくが、ただし、大学退職後も先生は旺盛な研究活動および執筆活動を続けられ、例えば、221ページにわたる英文の単行本 *The Civilizational Soul* (Koujinsha, 2015) [邦訳はないが日本語にすれば『文明の魂』] を出版されたことは付け加えておく。この本からもわかる通り、先生の研究分野の柱はアメリカの作家ナサニエル・ホーソン、イギリスの歴史家アーノルド・J. トインビー、モラロジー（道徳科学）の3つであり相互に関連しているのだが、私自身の専門分野（アメリカ文学・文化）と近いのは、『緋文字』（1850）で有名なホーソン（Nathaniel Hawthorne, 1804～1864）ということになるだろう。

川窪先生の編著で2005年に刊行された『ホーソンの軌跡——生誕200年記念論集』（開文社出版, 2005年）（正確には生誕200年は2004年だが同書の出版は2005年）の第一章に収められた先生ご自身の論文「ホーソンの先祖をめぐって」について少し触れておきたい。この論文は、「まえがき」で島田太郎氏も述べるように、イギリスからアメリカに渡ったホーソン家の「先祖たちについて詳しく述べ、彼らの行為が作品の中にどのように取り込まれているかを明らかにしていく」（「まえがき」iii）ものである。15世紀にイギリスの先祖が家の敷地で古代ローマ時代の金貨（先祖からの遺産）を掘り出したというホーソン家の伝説、ホーソン自身が「先祖調べ」をしていること、いくつもの作品を通して登場人物にも先祖の探求をさせていること（ただし、探したからと言って必ずしも何かが見つかるわけでない）など、作家ホーソンは先祖のことが生涯意識から離れなかったのである。

それでいながら、ホーソンは『緋文字』の序文「税関」の中で、先祖の地セイラムでは自分は「どこか他の所の市民」とやるせない気持ちを表し、また、自分と子孫については、自分のことをもし曾孫の代にでも思い出してくれたらそれはとてもうれしいというようなことを、自信なげに書いている。しかし、実際はそのような作家ホーソンの心配をよそに、ホーソン生誕200年を記念してセイラムでアメリカのホーソン学会やその晩餐会が開かれ、そこには世界各地の研究者やホーソンの曾孫たちが参加し、日本からも生誕200年を記念する論集がこうして捧げられており、このことを知ったら「ホーソンは何と言うだろうか」と述べて先生は論文を締めくくっている。弱気なホーソンを安心させるようなコメントで、少しユーモラスな感じもして、なかなか素敵な締めくくりだと思う。もし先祖を先輩、子孫を後輩と言い換えてよければ、川窪先生の後輩の世代が、大先輩のことをこのように思い出し、その足跡をたどっている様子を先生はきっとご覧になって喜んでくださっているだろうと思う。

本研究会は、川窪先生の遺産を継承し、研究・執筆活動が続けていく。川窪先生、後輩の研究をお見守りください。